

ヒトラーはなぜ熱狂的に支持されたのか

ドイツ文学者 エッセイスト 池内 紀 氏

【大澤】 本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。司会進行を務めさせていただきますコンテンツ編集室の大澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

第3回となる本日は、ドイツ文学者でエッセイストの池内紀先生をお招きして、「ヒトラーはなぜ熱狂的に支持されたのか」というテーマでご講演いただきます。

池内先生は1940年生まれ、東京大学に文学部教授として勤められた後、作家、翻訳家、エッセイストとして活躍され、数々の文学賞を受賞されています。特に、ゲーテやカフカといったドイツ文学の大作家の作品において、彼らを親しみやすく、身近な存在に感じさせるような新しい翻訳を手がけられました。また、ヨーロッパ紀行のエッセイ等は軽妙な語り口で、読者自身もその地を訪ねているかのように楽しませてくださる作風です。

本日は、講演を約1時間、質疑応答で約30分を予定しています。ヒトラーとナチス・ドイツを取り上げるということで、最初に歴史的な流れを私から簡単にご説明させていただきます。「5分でわかるナチス・ドイツ」といきたいところですが、当然5分で語り尽くせるわけがありませんので、なんとか先生のご講演につなげるお話ができればと思います。

講演

はじめに：ナチス・ドイツについての概略説明

まず「ナチス」とは、ご存じの方も多いとは思いますが、ドイツの政党であり、「ナチ党」とも呼ばれます。日本語での正式名称は「国民社会主義ドイツ労働者党」です。

その基本的な思想は、優生学的思想に基づくドイツ民族による共同体の形成——彼らはアーリア人と呼んでいますが、ドイツ民族が至上であるとの考え方で、反ユダ



ヤ主義と反共産主義が特徴です。また、指導者への忠誠・服従を優先する指導者原理が根幹思想にあります。

次に、ナチ党が出てきた背景について。1914年にオーストリアの皇太子フランツ・フェルディナントが暗殺されるというサラエボ事件が起きました。これを契機に第一次世界大戦が勃発しましたが、ドイツ帝国を中心とした同盟国側が敗戦。この戦争でドイツの帝政は崩壊し、1919年、市民層を中心とした共和制のワイマール共和国が誕生しました。

この敗戦によって、半ば強制的にベルサイユ講和条約が結ばれたことで、ドイツは周りの国から領土を奪われ、帝国領にして13%の領地と700万人もの人口を失いました。1910年の資料によると、当時ドイツの人口は約6,500万人だったそうなので、かなりの数の住民を減らされてしまったということになります。また、ドイツは戦争を引き起こした咎を受けて軍備を制限されたうえ、賠償金として当時の金額で1,320億金マルク、現在の日本円に換算すると約236兆円を請求されました。

ワイマール共和国では、民主的なワイマール憲法が制定されました。この憲法は国民主権をうたい、20歳以上の男女であれば資産に関係なく投票できる平等な普通選挙権や、国民の社会権の保障等を規定した、当時としては非常に先進的な内容でした。これは、ほかの国の憲法



大澤氏

の模範ともなっています。

一方、有権者による直接選挙で選ばれた大統領には、首相の任免権や国会解散権、憲法自体を停止する大権、国防軍の統帥権等、かつてのドイツ皇帝と同じくらい強力な権力が与えられていました。特に共和国の形成期は混乱状態にあり、反乱の鎮圧等でたびたび大統領令が発動されていたという歴史的事実があります。

さて、このような状況のなか、ナチ党躍進のカギを握るのがアドルフ・ヒトラーです。

1889年、隣国オーストリアに生まれたヒトラーは、一度ドイツのバイエルンに移住しましたが、またオーストリアに戻ります。その後、ギムナジウム——今でいう大学への進学を考えていましたが、親の反対に遭い実業学校に入学。しかし、父親が亡くなった後に中退してしまいました。ヒトラーには芸術の道に進みたいという希望があり、ウィーンの美術学校を受験しましたが、3年連続で不合格。その間に母親までも亡くしました。

そのままウィーンに残り、水彩の絵はがき等売って生計を立てていたものの芽が出ず、1913年には夢破れて同地を去ります。1914年に第一次世界大戦が始まると、バイエルン軍に志願して入隊。戦闘で負傷し、野戦病院に入院中の1918年、戦争が終結しました。

仕事がないという事情もあって、終戦後もワイマール共和国にとどまったヒトラーは、1919年、軍に諜報員として配属。同年9月、結成されたばかりのナチ党の前身「ドイツ労働者党」に潜入調査のため入党したことが、

ヒトラー台頭のきっかけとなりました。1920年、同党は「国民社会主義ドイツ労働者党」と改称。1921年、ヒトラーは党首に就任します。

1923年には政権を奪おうとクーデターを起こしますが失敗、ヒトラーは逮捕され、ナチ党自体も禁止されてしまいます。しかし、彼の影響力は衰えず、1925年にナチ党は再建集会を開き、ヒトラーも代表作『我が闘争』を完成、翌年にかけて出版されます。

1928年の国会議員選挙で、ナチ党は全体の2.6%にあたる12議席を獲得。翌1929年に世界恐慌が起きた後、ナチ党は勢いを増していき、1930年の選挙では107議席、18.3%を獲得して第2党に躍進します。さらに2年後、1932年3月の大統領選において、ヒトラーはようやくドイツ国籍を取得して出馬するものの、次点で落選。ただ、7月にナチ党は選挙で230議席、37.3%を獲得して第1党となります。

あくる1933年1月、ヒトラー内閣が成立。同年2月、国会議事堂放火事件が発生し、大統領令によりワイマール共和国の憲法で保障された基本的人権がほぼ停止されて、ヒトラーに敵対する勢力が大量に逮捕されます。3月、国会議員選挙でナチ党は288議席、43.9%を獲得。全権委任法、政党新設禁止法を相次いで制定します。全権委任法はすべてヒトラーに任せるという法律で、政党禁止法は新しい政党を立ててはいけないというものであり、この年、ついにナチ党が一党独裁体制を確立。そして、10月に国際連盟から脱退します。

1934年6月、「長いナイフの夜事件」でナチ党の古参幹部のうちヒトラーの政敵になりそうな人物が排除されます。そして、8月に当時の大統領パウル・フォン・ヒンデンブルクが死去。このときヒトラーは「首相」でしたが、大統領の職権と首相の職権を統合した最高指導者である「総統」へと登りつめます。この国家元首に関する措置について国民投票を実施したところ、投票率が95.7%、うち賛成票が89.9%と、非常に高い比率で信任されています。

翌1935年1月、住民投票によって、第一次世界大戦

で失ったザール地方がドイツ領として復活。3月には再軍備を宣言。そして9月、ユダヤ人から公民権を剥奪するニュルンベルク法を制定します。

その後、1936年に非武装地帯のラインラントへ進駐。この年にはベルリンオリンピックを開催しています。1938年3月、オーストリア併合。同年11月には、ドイツ各地で反ユダヤ主義暴動が発生し、被害者であるユダヤ人にさらに賠償金を請求するという非常に大きな迫害が行われた「水晶の夜事件」が起こります。翌1939年3月、今度はチェコスロバキアを併合。8月に独ソ不可侵条約を締結した後、9月にポーランドへ侵攻します。このとき、イギリスとフランスがドイツに宣戦布告をして、ついに第二次世界大戦が始まるのです。

1940年、ドイツはノルウェー、デンマーク、オランダ、ベルギー等、欧州の近隣国に侵攻していきます。そして、同年5月、悪名高いアウシュビッツ強制収容所を建設。9月に日独伊三国同盟を締結します。1941年6月、不可侵条約を結んでいたソビエト連邦に侵攻。12月には、日本がアメリカに太平洋戦争で宣戦布告をした後に、追従する形でアメリカに宣戦布告をします。

ここで、ナチスを取り巻く人物を簡単にご紹介します。宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルスは、ナチスのプロパガンダの立役者として有名ですね。それから、親衛隊と秘密警察を率いてホロコーストを引き起こしたのが、ハインリヒ・ヒムラーです。ヒトラーの後継者と目されていた人物はヘルマン・ゲーリングですが、マルティン・ボルマンに権力の座を追われてしまいます。このように、ナチス内部での権力闘争も激しく行われていたようです。

さて、1943年に入ると、一気に形勢が変わってきます。2月、ソ連のスターリングラードの戦いで大敗。連合軍も勢いを取り戻し、北アフリカや南欧を攻めるなかで、三国同盟の一員だったイタリアが7月に降伏。翌1944年9月にソ連軍の反攻により東部戦線が崩壊します。また、西部は北フランスのノルマンディー上陸作戦で連合軍が包囲網を狭めていきます。この頃になるとヒトラーの求心力も下がり、幹部による暗殺未遂事件も発生して

います。

1945年4月30日、ベルリンの地下にある総統地下壕内にて、ヒトラーは愛人のエヴァ・ブラウンと結婚した直後、夫婦で心中します。後継大統領に幹部のカール・デーニッツ、首相にはヨーゼフ・ゲッベルスが指名されますが、翌5月1日にゲッベルスも地下壕で自殺、これで政府機能が完全に崩壊してしまいます。そして、5月2日にソ連軍がベルリンを占領。6月5日にベルリン宣言があって、占領行政が開始されたのです。

以上、駆け足ですが、ナチス・ドイツの誕生から崩壊までの流れをご紹介しました。このなかで、選挙や国民投票においてナチ党やヒトラーへの賛成票が非常に多かったという事実をお話ししましたが、なぜドイツ国民は彼らを許容していったのでしょうか。そのあたりを、これから池内先生よりお伺いしたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。(拍手)

「国家社会主義」は誤訳

皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた池内です。

このような会で、どんなテーマがいいかと思案したのですが、いくつか考えたなかで自分がいま一番関心を持っているテーマがいいだろうと思って、ナチス・ドイツという問題と、ヒトラーという人物と、当時のドイツ国民についてお話ししましょうかということになりました。

僕はドイツ文学者として生きてきました。特にカフカの翻訳や評伝、ゲーテの『ファウスト』、また、ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』の翻訳等を行ってきました。幸いに押しつけられたものではなく、自分が訳したい、これならしたいという希望が、だいたいの本になってきました。

そのなかには、明らかに20世紀の歴史と関連していて、歴史を知らなければ作品自体も分からないだろうという強い結びつきがあるものがいくつかあります。たとえば『ブリキの太鼓』がそうです。ドイツの歴史の中で非常に奇妙な、異様な時代があった。それは1933年から

45年までの12年間。歴史ではナチス・ドイツの時代とされています。なぜあのような歴史があったのかということには常々関心がありました。僕が好きで、そして信頼しているドイツ人が、なぜああいう歴史を許容したのか。とても狂気としか思えない犯罪が、どうしてあれだけ大手を振って横行したのか。

先ほど、ナチズム時代の簡単な紹介がありました。大澤さんがまとめられたもので、僕は関与していません。一言付け加えると、ナチは「国民社会主義」すなわち「National-Sozialismus」という2つの言葉が語源となっています。ドイツ語では2つの言葉を合わせる場合に、ひとつの頭文字と、もうひとつから省略して選んだ短い文字をくっつけるというきまりがあります。ですから、ナチ (Nazi) は、NationalのNaと、Sozialismusのziをくっつけたものです。

また、最初に大澤さんから送られてきた資料には、「国家社会主義」という訳語が書かれていました。日本の本は多くがこの「国家社会主義」と訳しているのですけれども、あれは明らかに間違いです。本当は「国民社会主義」と訳さなければいけないのです。要するに、国民が参加してつくり上げた社会主義であって、国家が一方的に国民を引き回して実現した政体ではないわけです。常に国民が関与したり、国民が意思表示をする型をおびていたのです。

だから、ナチズムを日本語に一番正確に訳すとすれば、「投票型独裁制」となります。国民が投票して意思を示しながら、指導者は独裁的に進めていく。議会のような非常に時間のかかる機構は間に差し挟まない。政治体制からいえば、最も効率的なものとなります。もちろん、独裁者が正常で、かつ非常に有能であれば、です。

ヒトラーは、初期は非常に有能で、ひらめきがあって、雄弁で、清潔で、政治家に求められる積極的な言葉を10ぐらい重ねても構わないような政治家であったわけです。あれだけ悪名とどろいたヒトラーですけれども、初期の5年間ぐらいは、国民の声をひとりで代弁することができたのです。



もう少し正確に言えばひとりじゃないのですが、最終的にはヒトラーひとりが判断して直ちに実行しました。現状に照らしてぜひとも必要な議案あるいは法律が、即決で成立していくという体制ができたのです。国民社会主義は確固とした主義、考え方であって、いわゆる資本主義を中心とするデモクラシーやコミュニズム——いわゆる共産主義と並立して、あの時代は大きな国を動かすひとつの政治思想であったわけです。

それをたたきつづけるのにデモクラシーの国とコミュニズムの国とが、5年がかりとなったわけです。5年もかかったのは、そしてナチスの形勢が非常に悪くなって以後も3年続いたのは、それだけ「国民社会主義」という思想が生きていたからです。

そういうことですから、初めにお断りしておきますと、「ヒトラーは悪いやつだ」「ヒトラーという悪いやつがひどいことをした時代だ」という一面的なことでは決してないわけです。

レニ・リーフェンシュタールとの対話

本日は、僕がこれまでドイツで直接会って話をし、ナチスの時代について語った人を2人ご紹介して、そのことから話をしていきたいと思います。

ひとり、もしかしたら名前をご存じかもしれないですが、レニ・リーフェンシュタールという女性の映画監督です。本名はヘレーネといいました。

リーフェンシュタールは1936年のベルリンオリンピックの映画を撮った人です。『民族の祭典』『美の祭典』

と2部作で全体が『オリンピア』という映画。オリンピック映画の傑作として歴史に残っています。映画史上でも非常に高度な作品で、オリンピックに関するドキュメンタリーのスタイルはあれでできたようなものです。

彼女は1902年生まれですから、『オリンピア』を撮影したのは34歳のときです。そのことだけでも異様でしょう。ベルリンオリンピックはナチスが国家的な大宣伝に使った大イベントであって、その公式の映像を弱冠34歳の女性に任せたというのは不思議なことです。しかも、この女性はそれまで映画監督としてはほとんど実績がなかった。ナチスは自分たちの大事業の映像化をほとんど無名の女性に任せたということになります。これだけでも、ナチスが非常に変わった政体であったということはお分かりになると思います。

僕がレニに会ったのは1991年で、彼女が89歳のときです。あの人は非常に長命な方で、亡くなったのは101歳でした。ですから、89歳でもかくしゃくとしていました。ちょうどそのころ彼女が書いた回想記——自伝ですね——とても厚い本がドイツで出たばかりで、それを文藝春秋が翻訳して出しました。ついでに、彼女を日本に呼びたいという。その前に雑誌で特集をやるので、行ってほしいと頼まれたわけです。バブルの終わりで、非常に潤沢な出張となりました。期間は1週間と、時間の余裕があって、カメラマンと編集者と僕で、まる2日間、レニのインタビューにあたるという約束でした。

ちなみに、文藝春秋の社長からは、常々「池内さん、レニに会ったらぜひ聞いてくださいね」と頼まれていた質問がありました。彼女は非常に美人だったので、一説によれば「レニはヒトラーの恋人だった。だから、ああいう大役を任されたのだ」というゴシップがあったわけです。文藝春秋の社長は、そのことをぜひ聞いてくれということです。僕は、腹の中では「そんなばかばかしいことを聞けますか」と思っていましたし、また、「聞いたって、そんなことをベラベラしゃべるような人じゃないんだから不可能だって。そんなことはすっ飛ばしていい」と思っていたものの、ドイツに行ったわけです。

ミュンヘン郊外にシュタルンベルクという大きくてきれいな湖があって、その湖畔に彼女の立派な家がありました。そこで、2日にわたってインタビューをしました。

最初に、彼女は自分の書いた厚い本をボンと置いて、「私とナチスに関してはすべてここに書いてある」というのです。つまり、そんなことは聞いたって答えないという宣言ですよ。だから、僕はもう「しめた」と思って、「そんなことは聞かないし、こちらが聞きたいことから始めます」と言って、それから、幼いころのこと、なぜ映画をつくったのか、仕事におけるヒトラーとの関係はどうだったのか、そういうことを聞いていったわけです。

ヒトラーからの電話

レニは実に毅然として、女性の老人特有のしゃがれ声で、こちらをジッと見て話をしました。ドイツ人は話をするとき、相手の顔をジッと見るんですよ。ちなみに、美人は年を取ると、しわが寄って何とも言えない、魔女みたいな顔になるんです。でも、見ていると、美人だったことはちゃんと分かる気配が残っていました。

レニからは、いろいろおもしろいことを聞きました。

彼女はベルリンのブルジョアの娘でした。1920年代ぐらいまで、ヨーロッパでは女性のモダンダンスが非常に盛んで、イサドラ・ダンカンやアンナ・パブロワ等、有名なスターが出ました。モダンダンスはとても不思議な芸術で、オーケストラなりピアノがモーツァルトやベートーベンを演奏し、それを自分の踊りで表現するものです。僕はレニに何度か聞き直したんです。「モーツァルトを踊りで表現できますか」と。「できます」とレニは断言したけど、たぶん彼女の錯覚だと思います。

あのころは、そういう若い女性のモダンダンスが流行していた。最初、彼女はそれに打ち込んで、ドイツのモダンダンスのナンバー3ぐらいとまで評価されていました。ポスター等もずいぶん残っています。

ただ、20代の初めに、ひざを痛めてダンスができなくなってしまい、あきらめてこれからどうしよう、何をしようかと思っていたときに映画のポスターを見たそうで

す。そのポスターに「映画づくりに関心がある方は歓迎する」ということが書いてあった。当時、映画はまったく新しいメディアでしたが、それに惹かれて、レニはアーノルド・ファンクという映画監督のところへ行きます。ファンクは山岳映画で有名な監督で、日本にも来たことがあって、伊丹十三の父親である万作と合作映画『新しき土』をつくりました。その映画で新人俳優としてデビューしたのが原節子です。だから、ファンクと伊丹万作が原節子という後の大女優を世に出した。そういう監督がレニのことを知って、早速、スターとして使うわけです。あのころはスタントマンなんか使わないで、レニ本人が山に登り、谷を飛んだり、非常に危険なこともずいぶんやったようです。

それで、レニは山岳映画のスターになりました。しかし、スターだけではつまらないというので、30代の初めに『青い光』という映画をつくりました。それがどういっわけかヒトラーの目にとまって、1933年にヒトラーの官邸から「一度、ご相談したいから、お越し願いたい」と電話があったのです。おそろおそろ出かけていくと、ヒトラーがいて、「来年、1934年にナチスの党大会が開催される。その記録映画を撮る必要があるが、それをあなたに任せるからやってくれないか」と言ったそうです。レニは「私はずっと山にいた人間で政治のことは何も知らない。ナチスのSA（突撃隊）とSS（親衛隊）がどう違うのかということも知らない。そんな人間が党大会の記録映画を撮るはずがない」と言って断りました。

帰ってしばらくすると、また電話がかかってくる。「あの件はどうなったか、お返事いただきたい」という。それで、「あれはお断りした」と回答しても、「それは聞いていない。もう一度、お越しいただきたい」と言うので、官邸に出かけて行くと、「お断りしたというのは何かの手違いでしょう。われわれは計画を進めており、すでに案もできているのですよ」と言って書類を見せて、スタッフまで全部揃えているというのです。レニが「私はそんなの承知した覚えがないから、お断りする」と帰りますが、またしばらくすると、「計画がもう始まるから、ぜひこの場に

てくれ」という。

この話は、レニへのインタビューの中でも特におもしろかったところです。非常に狡猾な政治家が、まったくうぶな人を取り込んでいく過程なのですね。とぼけたり、わきにそらしたり、既定の事実のように言ったりして、自分のふところに入れてしまう。

そういう経過があって、34年のナチスの党大会、これは有名なニュルンベルクのナチス党大会ですが、その映像化をレニが監督することになった。映画のタイトルは『意志の勝利』です。機会があれば、ごらんになると良いでしょう。驚天動地というのか、こんな映画がよくつくれたと思うほどすばらしい映像です。特に上から眺望して、10数万のナチ党員が制服姿で、まさに一糸乱れず行進したり、動いたりする場面は圧倒的です。ナチスは儀式が大好きで、ああいうイベントの演出には実に天才的な人たちがたくさんいたものですから、見事な集団演技となるわけです。全体が一種のドラマになっている。それは大きな力を見せつける場であると同時に、あまりにも整然としているものですから、非常に運命的で悲劇性すら感じるような動きに見える。それも映像の力でしょう。

あの映画はナチズムをいろいろな人に見直させるのに大きな役割を果たしました。だから、現在のドイツでは上映禁止になっていて、ほとんどのドイツ人はあの映画を見たことがないのです。人を惑わしかねない魅力のある見事な映像だということです。

それが次の1936年のオリンピックの映像化の委託につながるわけです。36年のベルリンオリンピックは日本人もずいぶん活躍した大会です。また、アテネから聖火リレーが始まり、ずうっとバトンタッチしてきて、最後にスタジアムで聖火を点火するという儀式もベルリン大会から始まりました。現在のオリンピックで行われている儀式のほとんどすべてが、ベルリンオリンピックに始まっていて、そういったことも、レニの映像はとらえています。

ユダヤ人差別ともうひとつのオリンピック

ヒトラーはアーリア優生説でしたから、黒人が大嫌いで、黒人に対する偏見にあたることを公然と口にしてた男で、そのことは誰でも知っていたわけですが、あの映画の中では黒人に対する偏見は一切ありません。アメリカの男子陸上競技選手ジェシー・オーエンスは、ベルリンオリンピックで四冠を取った陸上競技の天才ですが、レニの映像では、跳躍する美しい黒人の肉体をなめるように撮っています。そして、それをヒトラーの思想とはまったく無関係にきちんと映像化しているのです。あれは明らかにレニの配慮だと思います。日本人もよく撮られています。ナチズムにおいては人種差別的なことが公然とあったわけですが、レニの映画ではそれらをまったく無視して、映像として美しいものをつくっているのです。これはレニの力だと思います。

もっとも、あの大会自体がナチス・ドイツの大宣伝イベントでしたので、実はオリンピックの前後の期間だけは、ユダヤ人迫害に当たるものは一切なかったのです。あの時期だけです。たとえば、往来に張り出していた「このユダヤ人の店で買うな」とか、公園の入口の「何時から何時までユダヤ人は立入禁止」とか、そういうユダヤ人に対する非常に露骨な差別をあらわした表示がドイツの国中から一切取り払われて、その期間はユダヤ人差別にあたるものはないかのようにしていた。さらに、選手村の村長がユダヤ人だったり、ドイツの選手団のリーダー、トップの旗手がユダヤ人のホッケー選手だったりとか、ベルリンオリンピックでは多数のユダヤ人を登用しているのです。

オリンピックは報道合戦でもありますから、世界中から新聞記者が来ました。日本からもたくさん報道者が行っていました。これまで「1935年に『ニュルンベルク法』ができて、ユダヤ人差別が公然化している。だから、ナチスはひどいのだ」ということをしょっちゅう言っているのに、オリンピックの間ずうっと流された情報では、一切そういう差別はないわけです。だから、世界の人が

ちは、「現地から送られてくるニュースにはユダヤ人差別がないじゃないか。どちらが正しいんだ」「日ごろナチスは憎まれているから大げさに言われているだけで、実情はそんなにひどいものじゃないんだ。あれは世間の偏見がつくったデマなんだ」となったのです。

結果として、ヒトラーの宣伝イベントとしてのオリンピックは大成功をおさめた。当時の日本人だって、オリンピック関連のニュースを見て、みんな「ナチス・ドイツは非常に統率のとれたすぐれた国だ。ユダヤ人差別なんて全然ないじゃないか」ということになったのです。

実は1936年夏のベルリン・オリンピックの直前、35年から36年の冬にかけて、ドイツでもうひとつのオリンピックがありました。そのことはあまり言われていないのですけれども、冬季オリンピックがドイツであったのです。ガルミッシュ＝パルテンキルヒェンという、南のアルプスのドイツの雪の多いところで開催しました。ガルミッシュ＝パルテンキルヒェンというのは、当時、ナチスが2つの村を強引にくっつけたものです。

ナチスにとっては、これがベルリンの予行演習だったのです。冬季大会で予行演習をやって、その成果をずっと検討して、一番有効なものをベルリンの夏にぶつけた。冬が5とすれば、夏は50ぐらい外国の報道機関が来ますからね。日本を含めて世界中が、ナチスの手玉に取られたのです。ここらならずも、世界中のマスメディアが率先してナチスの偽りの姿の広告をしてしまった。

ナチスに魅了されたレニ

レニのところで、そういうことを含めていろいろとお話ししました。でも、彼女は基本的に政治にはまったく関係なかったと思います。

レニは、「オリンピックは選手たちのものであって、観客のものではない。選手がどんな緊張を克服して自分の最良の結果を出すか。それを映像化したかった。それが一番分かりやすいのは表情だ」と語っていました。たとえば、100mを走るときのオーエンスがスタートのときにどんな表情をしていたか。ジッと精神を統一している顔、

スタートのときのものすごく緊張した顔、走り出したときの顔、ゴールに入ったときの喜びの顔、それをずっとカメラが追う。逆に、走り出した途端に転んでしまった選手の顔。要するに、選手の表情を非常に丹念に撮っているのです。

また、レニが映画を撮っている時の写真が残っていますけれども、いろいろな工夫をしていて、たとえばカメラの位置を自由にできる装置を使ったりして、下の位置から撮ったり、上から撮ったり、さまざまなことをやっています。

レニ・リーフェンシュタールは、もはや歴史上の人物でしょうけれども、私はたまたまそういう仕事があったものですから、じかに当人に会えて、しかも2日間もの長い時間にわたってインタビューすることができました。8時間ぐらい録音を取りましたが、実際に使ったのはそのほんの一部です。

一番おもしろかったのは、2日間の最後のことです。レニは「普通だったら通訳が入るんだけど、今回は直接話せたから非常に楽しかった」と言って、終わりに、ドイツ人がよくやるんですけど、お祝いにワインを飲みたいというのです。助手の人が奥からワインを取り出してきて、「ブロースト（乾杯）、おめでとう。よくやりました」と乾杯しました。

ワインを1杯飲んで、しばらくすると、さっきまで毅然としていた怖い顔のおばあさんがフニャフニャとなって、「オサム、私は酔っ払った」というのです。たった1杯だけです。それで、「2階の寝室で眠りたい」と言うから、しょうがないので私が背負っていきました。でも、レニはとても骨格が立派で、年を取っても大きな女性なのです。70代のときにはアフリカのヌバ族という集団のすばらしい写真集を出したり、90歳を過ぎても海に潜ったりして、映像作家として活躍していた人です。インタビューの時も、「次はアラビアの海に行くんだ」と言って、シュノーケルとかを用意していたところでした。

だから、背負うとガーンと重い。それを階段までヨタヨタ来て、やっとこさ上がって、「寝室は？」と訊いたら、

急にそのときちゃんとした声で「左」と言ったわけです。ベッドがあったので、その上にヨイショと放り出して、それで僕は出てきました。あとは知らないです。

ですので、僕がリーフェンシュタールをベッドに運んだことは確かなのです。文藝春秋の社長に「そういうことがあったんですよ」と言ったら、「池内さん、いいことしているんだな」と言うから、「あなた、何か勘違いをしているんじゃないですか。70年前なら、かついでベッドに運ぶことも楽しいでしょうけど、89歳のおばあさんを運んでいったい何が楽しいんですか！」と言ったことを覚えていています。

それにしても、20世紀の激動の歴史を生きた毅然とした女性が、たった1杯のワインで単なるおばあさんになったとは、ワインというのは本当に人間を裸にする魔法の飲み物ですね。あの体験は一番鮮明に覚えています。

さて、第二次世界大戦が終わった後、ナチスの宣伝に大きく関与した人間としてレニは逮捕され、戦犯として裁判を受けることになるわけです。そのとき彼女は、「自分はむしろ被害者である。私は芸術家として映像をつくったのだ。委託されたからつくった。そして、それによって自分の人生が大きく狂った。だから、戦犯ではなくて犠牲者であり、無罪である」と言って、5年間の裁判闘争をやって、結果として無罪を勝ち取るのです。ああいう女性是非常に強いですし、信念がありますから、中傷や誹謗に対して、裁判で戦っても常に勝ち取っていくのです。レニが自己弁護していることはその通りだと思います。その通りだと思いますけれども、同時に彼女がナチスの持っていた「力」の運動そのものに魅了されたことも事実です。魅了されたからこそ、あれだけすばらしい映像ができたのだと思います。

ヒトラーが独裁制にした理由

レニがナチスに依頼されて映画をつくっていたころ、ナチスはドイツ国民の90パーセント以上の信任を得ていました。独裁者にとっては夢のような数字ですね。1933年から39年の戦争が始まるまで、ドイツ国民の



池内氏

大多数はヒトラーを信頼していたのです。ヒトラーに対する信仰に近いものを持っていたのです。

このようにナチズムが広がった事実は、その前提を考えてみると、ある程度分かるわけです。第一次世界大戦後、33年にヒトラーが首相になる前は、ドイツはまったくひどい状態だったのです。ワイマール憲法は非常にすばらしい憲法でしたけれども、議会そのものは体をなしていなかった。政党が40いくつもあって、常に集合離反をして、くっついたり離れたしながら政権をつくる。どの政権も足を引っ張り合って問題を解決できない。いわゆる左派と右翼の政党が角突き合っており、時に殴り合いすら始まるような議会であったのです。

また、ナチスは別働隊として突撃隊(SA)と親衛隊(SS)という軍隊を持っていました。でも日本人にはあまり伝わっていないので誤解があるわけですが、実はナチスに限らず、ワイマール時代のドイツの政党は自分たちの政治集会を守るための防衛団、いわゆるボディガード集団を持っていました。だから、政治集会があると、だいたい血が流れるような騒ぎになったのです。この点がドイツという国家が、近代化の歴史の中で一番おくれていた部分です。ですので、実はナチスだけが突出して私兵組織を利用したようによく書かれますけれども、どの政党も同じような軍隊を持っていたのです。

そういう政党が政権をつくるわけですから、何ひとつ解決できない。非常に良心的な首相が何代も続いて何とかしようとするんですけど、1920年代にドイツを襲っ

たインフレは天文学的数字になってしまいました。トランクいっぱい札束を詰め込んでいっても、卵1個が買えるかどうかという話です。要するに、経済がまったく成り立たない。朝と昼と夜で値段が1桁ずつ違ってくる。それが23年です。それに Rentenmark という制度を導入して、やっとインフレを退治して社会が少し落ち着いたころ、29年に世界的な恐慌があった。だから、国が存亡の危機にあったわけです。

そういう状況の中で、誰か強い者が出て何とかしなければ国が減ってしまうということをドイツの誰もが思っていたのです。だから、1930年代の始まりとともにナチスへの支持は倍々ゲームのように伸びていきます。ヒトラーが首相になって、2ヵ月足らずで全権を握り、独裁制に移ります。そんな短期間に、そんなにスムーズに独裁制に移ることができたのは、そうでもしなければ今の問題は解決できないと、ドイツ国民がみな思ったからなのです。

逆に言うと、ヒトラーは初めのうちは独裁制をするつもりはなかったと思います。ヒャルマル・シャハトという、財務大臣を歴任した非常に頭のいい人物が述べていることですが、「少なくとも当座は、この形にしなければ山積している問題が解決できない。だから、議会には停止してもらって、議会で討議するのを省いて、全権を委任された形で問題を処理していきたい」と国民にきちんと言うのですよ。

最近の言葉だと、マニフェストとかアジェンダセティングと言いますが、「われわれはこういうことをやります」と、近年の政党がよく語っていますけれども、あれはナチスが最初にやったわけです。「われわれはこれをする。国民皆さんの意見を聞きたい。イエスになればやる。もしノーの声が大きければやらない」というわけです。

そして実際にヒトラーは課題をどんどん解決していくわけです。冒頭、当時のドイツの人口は6,500万人と紹介していましたが、その人口規模に対して失業者が600万人、一説によれば700万人いたのです。要するに、10人に1人は失業しているというひどい状態でし

た。そうした中で、ヒトラーは失業者を減らし、農業の生産を高めて、生活の安定を図り、若い人が結婚をできるような制度にして、産業家・工業家の中で巨利を得ているものは全部はき出してもらい、それを国民に分割したのです。

フォルクスワーゲンという自動車メーカーがありますが、ドイツ語で「フォルクスワーゲン」は「国民車」という意味で、これは国民社会主義が生み出した車なのです。ヒトラーは、「車の利用が豊かなものだけに限られているのは社会的不公平だ。すべての国民の手にわたる車をつくって、国民が安く買えるようにしたい」と、直ちにフェルディナント・ポルシェという自動車工学の権威に委託してカブトムシ型の車をつくってもらって、それを2年後に市販したのです。

それから、失業者に対して仕事をささなければいけないけれども、専門的な仕事は限られた人しかできない。一方、もっこを担いだり、ものを運んだりすることは誰だってできる。そこで、道路、いわゆる「アウトバーン」をつくるわけです。あのころは列車の時代で、鉄道が生命だ考えられていましたが、「これからは車だ、道路だ」という考えのフリッツ・トートという人物がいて、彼に全部委託して、現在のドイツで使われている高速道路のかなりの部分をあの時代につくりあげたのです。

また、貧しい生活をしていて、旅行もできないという人たちに、非常に安く、そして夫婦で豪華客船の旅をするということ、社会福祉で実現するのです。ナチスの福利厚生施設は非常に充実していて、全国で2,500人ぐらいの事務局員を抱えており、7万5,000人ぐらいのボランティア、特に若い人が手伝っていました。それで、映画も見られない、芝居も見られないという貧しい家庭を対象として、いろいろなイベントや催しを提供して、そういうことに縁のなかった人たちがコンサートに行ったり、芝居を見たり、運がよければ船旅ができたりするようになったのです。だから、それまでナチスに対して非常に厳しい目で見っていた人が、なだれを打つようにして支持していったのです。要するに、国民社会主義がここ

に実現できたわけです。これが1938年までの状況です。レニの言い分である、「私はみんなと同じようにナチスに浸って、みんなと同じように、ナチスのためにいい映画をつくりたかった。それだけで、どうして犯罪になるのか」ということなのです。

馬小屋でのギュンター・グラスへのインタビュー

今日お話ししたいもうひとりの人物は、ノーベル賞作家のギュンター・グラスです。今年(2015年)の4月13日に亡くなったので、僕は新聞に追悼記を書きました。彼のところには、1996年に訪ねていきました。NHKの番組で「1時間ものでギュンター・グラスにインタビューしてくれ」と言われたので、「僕がそんなものやったら誰も見ませんよ」と返したところ、「いやいや、いいんです」ということで、取材に行きました。

グラスは、もともと彫刻家になりたかった人で、美術学校を出ているものですから、絵がうまいのですよね。絵と詩で自然環境はいかに荒れているか、破壊されているかという内容を本にしました。それで、グラスの考える自然破壊に対して、人間はどういうことをすればいいか、21世紀の自然に対する考え方を尋ねて、ほかにもいろいろ話をしてほしいということで取材をしました。

グラスは1927年生まれですから、当時は69歳でした。まだノーベル賞をもらう前でしたから、わりと暇だったんでしょうね、引き受けてくれました。北ドイツのリューベックという港町があって、そこに近い小さな村に、リューベックのブルジョアがつくった別荘があって、それを自分の家にして、別荘に附属した馬小屋を改造して仕事場にしていました。そこでインタビューをしたわけです。

グラスは喉の手術をしたばかりで、インタビューの最初、とても機嫌が悪かったのです。僕の質問に対して、「うん」「ああ」「そう」と、これぐらいしか言わない。「こんなんじゃ、インタビューにならないよな」と困っていたのですが、その時に「そうだ。新刊の小説の話をするとう機嫌を直すかな」と考えました。

グラスの新刊は、『はてしなき荒野 (Ein weites Feld)』というタイトルで、僕がドイツに行く前の1995年に出たものでした。「せっかくだから、それを読んでいこう」と思って飛行機の中で読んでいたのですが、ちょうど半分ぐらいでドイツに着いちゃったのですね。僕は「あまりおもしろい小説じゃないし、いいや」なんて思っていました。

その小説の中に「パーテルノステル」という一種のエレベーターが登場するシーンがありました。上がったりが下がったりするのがエレベーターですけど、ドイツの大学にある「パーテルノステル」は、ドアがない箱がぐるぐると回って、ずうっと動いているのです。それに、みんな飛び乗って、飛び降りるという非常に便利な機械です。「パーテルノステル」というのは、元は「我が父よ」という意味です。それが転じて、教会で数珠玉をみんなでグルッと回しながらお祈りをすることを意味しています。そのパーテルノステルと同じように、箱がずうっと動いているエレベーターが小説に使われていました。

そのシーンが、私にはこの小説のテーマをあらわしているような気がしたので、グラスに「歴史観そのものをあらわしているようなあのシーンが非常に印象的だった」と言ったのです。本当はそこしか覚えてなかったからですが。すると、グラスはパイプをくわえていたのが「オッ」と表情を変えまして、「こいつ、まんざらバカじゃないな」という顔になって、「いろいろなやつがいろいろなことを言ったけど、そこを指摘したのはおまえが初めてだ。その通り」と言いました。そう言われても、ほかは覚えていないからなのですが…。

でも、それからはガラッとグラスの機嫌が直りました。作家というのは作品をほめられたら一番うれしいのですね。こちらが恐縮するぐらい親切に話をしてくれました。ドイツの作家はみんな弁舌家ですから、自分の説をとうとうと述べて、なおかつ終わった後で、自分の絵を描いている普段は見せない部屋に通してくれたのです。

この時は、もうひとつおもしろいエピソードがあります。インタビューが終わってから、「一杯飲もう」という

ことになりました。もともとグラスは酒飲みですからね。でも手術のせいでしばらく我慢していたらしい。いすの下から、60度か80度ぐらいある強いリキュールを出してきて、自分と僕の両方のコップに注いでくれました。でも、自分のところには多めに入れて、相手は半分しか入れないという、飲み助のやり方です。田舎のおじいさんがよくやりますね。それで、コップをカチンと合わせて乾杯しました。

そこへ奥さんが、インタビューが終わったらしいなと思ってコーヒーを持ってきたのです。そして、「あなた、手術の後はお酒はだめだって医者が出たでしょう。何ですか、この強い酒は！」と夫をどやしつけたのです。グラスはヘドモドして「自分は別に飲みたくはないのだけれど、日本人が飲みたいというから」と、3回も「日本人」のせいと言っていました。だから、いかに奥さんが怖かったかということです。

グラスの告白と事実

ギュンター・グラスについては、2006年8月に大きな事件が起こりました。グラスは自伝『玉ねぎの皮をむきながら』の中で、戦争中、武装親衛隊に所属していたことを公にしたのです。彼は戦後ずっと社会運動をやって、社民党に入れ上げて、いろいろな戦争犯罪についても痛烈なことを述べてきました。その本人が自分の過去を隠していた。そして、SSに所属していたことを自伝で初めて公表したので、ドイツでは国を二分するほどの騒ぎになったのです。当時の日本では「SSにいたギュンター・グラスはノーベル賞を返上か」なんていう記事の見出しもありました。

まず事実を整理しますと、グラスが軍隊に取られたのは16歳の時、まだ少年です。当時の少年たちはSSにあげられていました。SSの制服は非常にしゃれていて、少年たちはナチスの軍服に夢を抱いていたのです。また、当時は召集を受けたとしても、どの隊に入るかは本人には分からないのです。配属は自分の意思でも何でもなく、たまたま武装親衛隊に所属させられたのです。まして16

歳ですからね。歴史家がちゃんと説明しましたけれども、実はこの部隊は本来のSSとは何の関係もなく、大戦末期の非常に敗色の濃いときに、幼年兵を入れて危険なところへ投入するためにつくった部隊で、それを「武装SS」と称していたのです。非常に特別な部隊で、ほとんど10代の少年たちで構成されていました。だから、SSだったということを騒ぐ理由は何もないのです。それが事実のひとつ目です。

それから、入隊から2年後、グラスが18歳のときに戦場でけがをして軍から離れてしまい、軍医病院に入れられたのち、敗戦を迎えるわけです。ただし、そのことを言わなかったのは問題です。

なぜ言わなかったのか。グラスは大変な戦略家ですから、そのことについて鮮やかな対処をしました。テレビであれ、集会であれ、常にいろいろな討論会に出ていて、「なぜ自分が言わなかったのか」「なぜ言えなかったのか」について語ります。「ドイツの民衆がどう思っていたのか。そういうことを、たとえば30代の私が言った途端に作家生命を絶たれていただろう。あのときは、みんなに責任がある、ナチスに対して責任があるにもかかわらず、誰も自分で責任をとらなかった。そのことを思い出してもらいたい」と語りました。ドイツ国民は、すべてナチスの幹部のせいにして、国民があずかり知らぬところで歴史が動いたんだという顔をした。要するに、歴史をもう一回見直していくと、国民全体がそれぞれなんらかの形で歴史に関与していたのに、自分たちはむしろ犠牲者だというふうに戦後、しらを切ったのではないか。そういう議論を3ヵ月ぐらい続けるわけです。

マスコミもそれを放送するし、週刊誌は特集で取り上げるし、また、それらを全部記録にとって本にもしました。つまり、グラスは自分の過去を公表するにあたって、それ自体を現代史の問題として扱ったのです。だから、あの騒ぎは直ちに消えていきました。「ナチスに関してはそういう関与の仕方もあったのか」と思い、僕はさすがギュンター・グラスだと思いました。



池内氏

ヒトラーと取り巻きたち

さて、私が今日話すのは1938年までのドイツのことです。その時代には、ヒトラーが非常にすばらしい政治家で、ナチズムがすばらしい思想であるという一面があったということです。こんにち、そのことはあまり知られていません。でも、そうでなくては、敗色が濃くなってからの戦争でのドイツの粘り方があり得ないわけです。また、アウシュビッツ等での大虐殺についても、あれはシステムがどうしてもなく働いたからだけではあり得ない。なんらかの思想的な背景がなければ、ああいうことはあり得ないと思うわけです。

先ほどお話ししました通り、たとえばナチスの党大会の記録は、自分がいいと見込んだ、ほとんど無名の女性であったレニに任せる。道路づくりはトートという道路について新しい考えを持っている男に任せる。宣伝は口八丁手八丁のゲッベルスに任せる。ヒトラーという人物は独裁者であって、同時に共催者で、周りに非常に有能なスタッフを抱えていた。ヒトラーの初期がよかったのは、すべてそれがうまくいったからです。

財務もそうした分野のひとつです。財政については、シャハトという人物にヒトラーは任せました。「ヒトラーを支えた銀行家」という本があって、翻訳もありますが、その人物の評伝です。シャハトは、ナチスの時代の財務を担当して、1920年代の天文学的なインフレを退治した男です。23年に大インフレが起きたときに彼は抜擢さ

れました。当時のシャハトはまだ40代になったばかりだったと思いますけれども、その彼がドイツ銀行の総裁になるのです。40代で直ちに総裁になって、レンテンマルクという新しい財政法を導入し、それでインフレを退治するわけです。世の中にはいろいろな才能の持ち主がいますけれども、彼は財務の天才にあたるでしょうね。

シャハトを財務担当に抜擢しましたが、彼自身はもともとナチスが嫌い、「ナチスなんていう政体は国を滅ぼす元だ」と公言していました。そのようなことを言う人物をドイツ銀行総裁に任じて、同時に経済大臣に任じたのです。ナチスからすれば、一番おいしい職を部外者、しかもナチスが嫌いな男に取られるわけですから、ゲーリングなんかは猛烈に反発しました。シャハトを暗殺してしまおう、という感じだったのだと思います。これに対してシャハトは「撃つのは構わない。ピストルを使うのも構わないけれど、後ろから撃ってくれるな。ちゃんと前から撃ってくれ」ということを公然と言っていたのです。それによって、逆に暗殺できなくしたわけです。シャハトは大変な知恵者で、有能で、ナチスの5年間の財務は大きく立ち直りました。

ヒトラーのやり方は、これと見込んで能力のある人物に全部を任せるのです。当然、いろいろなナチスの焼きもち焼きや取り巻きが「なぜおれじゃなくて、あいつだ」と言ってくるわけです。それを全部強力でバックアップして排除する。34歳の女性がナチスの大イベントの映像を撮影するとか、ある人物が描いたアウトバーンの青写真が3,000kmぐらい実現するとか、そういうことが起こりました。さきほどお話しした福利厚生はロベルト・ライという、これまた天才的な人物が担当するわけです。ほかにも、たとえばヒトラーの写真は、「写真はおまえだ」と、決められた写真家がすべて撮っていました。だから、ヒトラーにはいろいろな写真がありますけれども、全部ハインリヒ・ホフマンという写真家が撮っています。ホフマンはヒトラーの人物像を際立たせるのが非常にうまかったのです。そういう、それぞれが専門的な才能を持っている人物がヒトラーの周りに10数人もいたわけです。

ただ、1938年ぐらいから、ヒトラーの周りから非常に有能で骨のある人物がひとり欠け、2人欠け、あるいは自殺したりしていき、徐々に離れていくのです。たとえば、シャハトは38年にとうとうゲーリングに職を取ってかわられました。それでもヒトラーはシャハトに未練があって、無任所の大臣に据えておいたのですけれども、44年にヒトラー暗殺事件に関与したとして逮捕されて強制収容所に入れられてしまいます。

才能ある人たちが死んだり辞めていって、その後がまさに、取り持ちや出世ねらいがどんどん入ってきます。彼らは、親分が何気なく言ったことを拡大解釈して受け取ったり、ちょっとしたことを非常に膨らませたりしました。要するに、その意に沿うように立ち回るご機嫌取りですよ。それを政策として実行するわけですから、当然、奇妙な状況になっていきました。

だから、38年を境にして、ヒトラーの政治は急激に変わっていきます。批判のない権力構造がいかに早く腐敗するか。組織がいかに自壊していくか、変質していくのが早いのかということは、ナチスの体制を見ていくとよく分かります。

きょうは、あまり日本の方に知られていない部分ですが、初期ナチスが国民をとらえていった、陰ではなくて光の部分をお話ししました。ウェブでも月に1回、このような話を書いていますから、もしよければご覧いただくと、今日お話ししたようなことが、もっとくわしく、形を変えて出てくるだろうと思います。(拍手)

質疑応答

【司会】 どうもありがとうございました。ここからは質問をお伺いしたいと思います。

【質問】 ご講演いただき、ありがとうございました。

今日はナチスの光の部分をお聞きしたわけですが、1938年までのヒトラーは結構すばらしかったと思ってしまったのですが、そういうところもあったということなのでしょうか。

【池内氏】 その通りです。もうひとつ言いますと、ナチスは都合の悪い情報は表に出していなかったのです。たとえば、「強制収容所があちこちにできて、ユダヤ人が送られているらしい」とか、「ゲシュタポという組織が新しくできて、政治犯を逮捕して、場合によれば虐待しているらしい」とか、そういううわさはあったようですが、大多数の人は「らしい」で、それ以上は知りたいたとは思わなかったのですね。

知りたいと思わなければ、「そういうことがないだろう」「できたらいいな」「単なるデマではないか、そうであってほしい」となり、その次は、いろいろなところからナチス批判がありますから、「アンチ・ナチスの国から流された情報にわれわれが惑わされてはいけない、それは根も葉もないことだから」という思考に進んでいったのです。つまり、知りたいと思わないことについては、ないと思う方の情報を喜ぶというふうに、国民意識は変化していったようですね。

【質問】 そのようなドイツの国民性と日本の国民性は似ているところがあると感じられますか。

【池内氏】 国民性という大きな問題はともかくとして、たとえば戦後の民主化なども、日本人が自分たちが勝ち取ったものでなくて、これはアメリカからいただいたものでしょう。要するに、革命という形で自分たちが実現した政治体制ではなくて、もらったものです。

ドイツの場合は、ナチスの時代に「ドイツ革命」という言葉が言われていました。すなわち、ナチスは「われわれが初めて革命をするんだ。自分たちが国を変える

んだ。それはドイツ革命の唯一の例なのだ」と言っていたのです。そして、戦後の民主化も日本と同じような形でした。こうした政治状況の成り立ちからいえば、ドイツと日本は非常に似ていると思います。

ただ、一番大きく違う点は、ドイツ人が大いに議論をすることです。ドイツ人は非常に議論が好きです。「私の考えはこうだけど」「私の意見によれば」「私の考えによれば」と、常に頭に置いて延々としゃべる。つまり、自分の考えを持たないと会話が成り立たないのです。「どう」と聞かれて、「うん、いいんじゃないですか」なんて、そんなことを言えば、単なるバカに見られてしまいますからね。どんな仲間の小さな会であれ、自分の意見を持たないといけない。それがドイツと日本の大きな違いです。

もうひとつは、ドイツにはしっかりした週刊誌があるということです。『シュピーゲル』とか、あと2つぐらいのオピニオン誌があります。これらの週刊誌をタクシーの運転手も読み、ジャーナリストも読み、町の商店の親父さんがお客さんを待っている間に読んでいたりするのです。私も丸善に行くたびに買いますが、結構高度な内容です。これらの雑誌は、週刊で常に一番の問題点を20ページか30ページにわたって特集します。その特集はきちんと取材してあり、正確です。3・11の大地震とその後の福島第一原発の記事で、一番正確で、一番印象的で、一番充実していたのがドイツの『シュピーゲル』の特集でした。写真も日本の写真では見られないものが収録してありました。日本の写真が日本の新聞で見られないということは、日本の新聞社が自主規制して載せないからです。そういう点で、議論をする習慣があること、良質の週刊誌を持つこと、この2つの点が日本と違ったところですよ。

ちなみに、日本の政治家はヒトラーほど強烈ではないし、周りにいる人たちもヒトラーのケースではなさそうなので、これはわれわれにとって幸いだというのが私、池内の意見です。

【質問】 ありがとうございました。



【司会】 ほかにご質問ある方、いらっしゃいますでしょうか。

【質問】 ご講演、ありがとうございました。

今日は、ナチス・ドイツの光の面をご説明いただいたかと思いますが、正直言って、まだ納得できないような部分もあります。と言いますのは、1938年に至る5年間は光の面があったということですが、私の記憶だと、この時期に同時に焚書も行われていたと思うのです。実は今から20年ほど前にベルリンに行ったときに一番印象深かったのが、ベーベル広場の真ん中に四角い穴があいていて、そこにガラスがはめられているだけの焚書の記念碑でした。そのなかは昼間見ても何も見えないのですが、夜に行くと、ぼんやりと白く光っていて、何も入っていない本棚がただ設置されているというものです。そして、その脇のプレートには「ここに本を焼く者は、いずれ人間を焼く」というハイネの言葉が添えられています。

この焚書の時代は、先生が今日ご説明された光の時代と重なると思うのです。そうしたときに、当時生きていたドイツの文学者や思想家たちはナチスや焚書にいったいどのような態度を示し、それに対して意見は言わなかったのか、その辺のご説明をしていただけますでしょうか。

【池内氏】 いい質問ですね。

そのときにナチスに対して意見を言い、異義を申し立て、抗議し、反抗した人は大多数、国を捨て――要するに亡命をしました。たとえば、トーマス・マン等は、

一番早く亡命しています。

その次は沈黙する。一切表に出ない。「国内亡命」といって、自分の見聞したこと、要するにナチスの時代がどういう時代であるかを克明に記録には取る。しかし、それは公表しない。それが見つかるとう非常に危険ですから、自分の秘密文字で書いたりしました。ケストナーという作家は国内亡命を選んだ人です。

それから、ナチスになびいていった人たちもいます。ナチスの御用作家あるいはナチス文学の担い手になった人もいるのです。すべてが政治的な判断ではなくて、ナチスが唱えた国民社会主義について共鳴した人の数も少なくないです。

だから、いろいろなケースがあります。数でいえば、異義を申し立てた人が一番多いでしょう。次には逮捕されて強制収容所に送られた人たちも少なくないですね。今日は光の部分の話しましたが、実は同時に、この時期は強制収容所がつけられた時期でもあるのです。

ただし、これはいくつか注釈を加えないとちょっと難しいので、本日の話からは省いたわけですが、初期の強制収容所は明らかに政治犯に限られていたのです。また、収容所でどういう生活をしていたのかは、ある時期までは公表されていました。それがだんだん拡大されていく中で、ユダヤ人の絶滅というとならない、史上に前例のない事態に発展していくのは、先ほど言いましたけれども、ナチスの組織が自壊・変質していく中で生じたことだろうと思います。

今、質問された方がおっしゃった「焚書」ということは非常に大切なことなのです。1933年にゲッベルスが音頭を取って、反ナチスやユダヤ文学の本を焼く政治的イベントをやったわけです。自分たちの運動に反対する人の本を燃やすという儀式をわざわざやったのです。

問題は、その次なのです。今おっしゃった通り、ドイツ人はその歴史を現在もちゃんと保存しているのです。われわれドイツ人の父や母の世代はおろかしいこ

とをしたと、ここで本を燃やしたんだということ、そして「本を焼く者は、いずれ人間も焼く」と、ユダヤ人のハイネの言葉をそれにつけ加えて、現在の人にもそれを目に見える形で残しているのです。

つまり、「記憶する」ということをドイツ人はきちんと行っているのです。一方で、日本人は「水に流す」、なかったことにしようというのが好きでしょう。日本人は記憶をなくすのは非常にうまいのです。記憶をなくしたものは歴史をもなくするわけです。ドイツ人からみると、それは成り立たないということになります。

今おっしゃったように、「なぜああいうことがあったのか」ということも非常に大きな問題ですけれども、現在の時点であれば、そういう蛮行が行われた事実をきちんとモニュメントとして残していることも、それ以上に重要だとドイツ人は考えているわけなのです。そして、こうした場所に生徒たちを連れてきて先生が教える。旅人がそこに立ちどまって見ることができる。この広場で非常におろかな歴史があったということを再確認できる。こういう歴史的な装置をこしらえているということは、ドイツ人の非常にすぐれた資質だと思います。

だいたい、ヨーロッパの町は記憶都市なのですよ。通りの名前に8月18日通りとか、いろいろと名前がついているでしょう。町全体が歴史を記憶するための装置としてつくってあるわけです。だから、革命のあった日がこの通りで、あのとき殺された人物がこの通りでという、町自体が記憶を失わない、要するに歴史を失わないための装置としてつくられているわけです。

この点でも日本人とヨーロッパ人は大きく違うのです。たとえば、日本人は過去に非常に大きな事件が起きた建物や土地をどうするかというときに、思い出すのは辛いからと、全部壊しちゃって、現在の建物よりも高層にしたら、これだけの経済効果があるとか、ほぼすべて経済的な効用で判断して、歴史的な遺産が消えていくわけです。日本人は、それが発展だと思っているふしがあります。これは異様な事態だと思います。



池内氏

国民性の問題もあるのでしょうけれども、日本ほど歴史を尊ばない国は少ないだろうと思います。

【司会】 ありがとうございます。時間がちょっと過ぎています。あと2、3、質問があればお伺いします。

【質問】 先生、今日はいいお話をありがとうございました。

先生から見て、どうしてヒトラーはあれほどたくさんユダヤ人を虐殺していったのだと思われますか。

【池内氏】 ヒトラーの著書『我が闘争』の内容は、アーリア人がすぐれているのだという、要するに人種問題がかなりの割合を占めているのです。あの著書に書かれている内容は、本来は非常に特別な男の奇妙な夢に終わっていたはずなのです。そのような本の中の世界が実際の政策の中に取り込まれて、しかも実現したということが異常な事件だということです。

それから、あの時代のドイツに限らず、そもそも中世の時代からヨーロッパ全体にユダヤ人に対する差別意識が濃厚にあったことも確かです。現在でもなくはない。たとえば、フランスでは、ドイツに占領されたヴィシー政権の時代、レジスタンスが非常に盛んであったというレジスタンス神話一色でした。しかし、実際はそうではなく、フランス国内のユダヤ人を強制収容所に送るのに、フランスの警察も市民たちも大いに協力したということ、シラク大統領が認める等、最近になって広く検証されてきました。映画にもなっています。フランスですら、そういうことがずいぶん

ありました。

また、ユダヤ人の財政力に基づいて、特にマスコミと銀行の大多数がユダヤ系です。今のアメリカなんか、まさにそうでしょう。マスコミ、ジャーナリズムと銀行を押さえているわけですから、これは強いです。お金と情報を握った人たちに対する憎悪は非常に起こりやすい。だから、銀行やマスコミをユダヤ人に絡めて罪悪視することは非常になされやすいわけです。

ヒトラーの時代は、初めはユダヤ人を隔離して、強制収容所に送る、あるいは国から追放するという政策をとりました。それが、一定の場所にとじ込めて絶滅を図るという政策に変質していったことが異様な事態なのです。要するに組織が自己展開を始めると、とどめようがない。

これは技術も同じことで、福島第一原発の炉心の制御はもとより、汚染水すら満足に処理できないという状況を見たら、人類の手に負えないほど技術だけが進展していったことは明らかです。組織が腐敗したときも、同様にとどめようがない。ナチスの後期は、その典型的な例だと思います。

きっかけとなったヒトラーの夢が現実の政治となり、現実の政治から組織の中に入り、組織の中の、いわば出世争いでもって、自分の功績を上げるためのみにそれを発展させる、そういう経過だったと思います。技術者が自分の発明という名誉のために、危険があると分かりながらも、実現するのと同じようなものです。

それから、アウシュビッツ等でユダヤ人が集団的に殺されているという情報は、少なくとも、アメリカやイギリスの諜報機関なり政府関係者はある程度は知っていたはずですが、けれども、それに一切手を打たなかったことも事実です。イギリスやアメリカにとっては、ナチスとソ連とを角突き合わせて、お互いに両撃ちになるのが一番願わしい事態なわけですから、ナチスのやっていること、ひとつの民族の絶滅作戦なんていう史上なかったような事態が現実には生じていることについては、ほとんど秘密だったのです。

とりわけポーランドのユダヤ人をめぐっては、さまざまな国の思惑が絡み、いろいろな面が重なり合っていたので、問題をさらに複雑にしています。僕は今まで、こういうこととあまり関係しないことをやってきた人間ですけど、最後の仕事として、そういうものを自分の本の中に取り込んでみたいと思っています。ポーランドのユダヤ人についてはかなり勉強したものですから、まずはそれについて書いてみたいと思っています。

【質問】 ありがとうございます。

【司会】 その他、ご質問がありましたら、お願いいたします。

【質問】 先生、ありがとうございます。

先生の話聞いていて、ドイツの映画『白バラの祈り』を思い出しました。その映画の中で、逮捕される学生が極めて合理的な尋問でわなにはまるとか、熱狂的な裁判官がすぐさま死刑を宣告するとか、そういうシーンが印象に残っています。

この映画は、ドイツ人の極めて合理的な物事を考える性格と、一方で熱狂的で狂ったようになることもある、というドイツ人の二面性を描いているのではないかと思ったのです。当時のドイツ国民も、合理性の一方で、熱狂的に第三帝国を支持するというエネルギーがヒトラーの政策を後押しして、ああいう時代をつくったのではないのかと思うのですが、いかがでしょうか。

【池内氏】 今おっしゃったのは、「白バラ」といって、ミュンヘンで起きた反ヒトラー、ヒトラー抵抗運動のことです。1942年から43年にかけて、ミュンヘンの学生たちが「白バラ」という暗号名で反ヒトラーの文書をばらまいて、自分たちの意思表示をしました。現実には一般の人は動かなかつたので、ほとんど効果はなかつたのですが、ハンス・ショルとその妹ゾフィー・ショル兄妹が中心となり、ミュンヘン大学の講師がバックについて、チームをつくったのです。けれども、逮捕されて、ほとんど即決裁判で死刑となりました。裁判官

はローラント・フライスラーというナチスの御用裁判官で、ナチスの裁判官の中でも極端なほどナチズムに協力した人物です。ほとんど審査しないで何千人となく、死刑を申し渡しました。ヒトラーはフライスラーの能力はあまり信頼していなかったようですが、少なくとも忠誠心は買っていたようです。

それが映画化されたのが『白バラの祈り ソフィー・ショル、最期の日々』です。映画の中で私が一番印象深かったのは、尋問の仕方です。尋問する役割の人物は、生粋のナチ党員ですが、事件を起こした彼女とほぼ同じ年頃の娘を持っているという検察官です。彼はナチの思想を信じているし、ヒトラーも信じている。だから、白バラの行為は違法だと確信している。ただし、尋問する中で、「人間の精神的な偉大さが彼女にあって、自分にはない。自分は単なる職務で正義を装っているだけで、彼女が述べることの方が人間の正義としては正しい」と考える場面がある。これは原作の中にもはっきりと書かれています。

だから、検察官は何とかして彼女を助けてやりたいと思うのです。そして、「兄から言われたからしたんだ。私は幼くてよく分からなくて、単に手伝ったんだ」という返答を彼女から引き出そうとします。それに対してソフィーは、「いえ、私ははっきり自分の考えでこの行動をしました。兄とともにこの行動を起こしたことに一切悔いはありません。私が一番心配しているのは、私たちが秘密の文書を謄写版で刷った大家さん、おばさんの娘にもうすぐ子どもが生まれる。こんな事件であの部屋が搜索されて、孫がちゃんと産まれるかどうか心配だ」と答えるのです。

このように回答する二十歳前後の娘に、人間の偉大さというものが見事にあらわれています。検察官は尋問者とすれば強い立場だけど、2人の関係でいえば、完全に敗者です。白バラは、事件としてはほとんど効果はなかったのですが、ドイツ人として、自分たちがこういうことを起こしたのだ、国民が単に従ったのではなくて、異義申し立てをして、こういう行動をした



中谷理事長

ということを残したいと。自分たちは歴史を生きる人間だから、殺されることに何の悔いもおそれもないというシーン。白バラの尋問調書という本があって、これも翻訳が出ていますから今日でも読めます。あの時代の中で、10代の若い人たちがいかに偉大な行為をしたのかということは、今のわれわれが読んでも感動するものです。

【質問】 ありがとうございました。

【司会】 お時間もかなり経過しましたので、最後に、中谷理事長にご講評をいただきたいと思います。

【中谷理事長】 池内先生、本当にありがとうございました。人間の持っている、性(さが)を深く思い知らされた感じがいたします。

西洋近代社会は、人間が理性的な動物であって、理性こそ人間社会の明るい未来を創るという「啓蒙思想」を前提にしてきましたが、ヒトラーの登場という20世紀最大の事件は、理性の対極にある衝動とか感情暴発の危険性を明らかにしたように思います。理性だけでは社会の動きをとめられない、それが人間社会の現実であるということを実証したわけですね。あえて言えば、「理性と衝動をどうやって妥協させるのか」ということが、現代社会が抱えている最大の問題なのかもしれません。

原発問題についても、よく考えてみると、最終処理方法すら分かっていないのに、よくあれだけどんどん推進できるな、と思います。でも、自分の中で「原発は

ちょっとまずいのではないか」という理性的に考える自分と、そうではなくて社会の動きに流されて、「あまり大っぴらに反対を言うとまずいよね」という自分と、そういうふうに分裂している人が結構多いと思うのです。

経済の面でいうと、グローバルに資本が自由に動く世界になって、下手をするとそれが暴発してバブルが崩壊するということをみんな知りながら、グローバルな資本移動に制限をかけるのではなく、その逆に「とにかく規制撤廃だよね」という話にいっちゃうわけですね。

きょう池内先生がお話になったヒトラーの問題は、人間社会の深い問題をいろいろな形で浮き彫りにしてくれるきわめて重要な歴史的事例だと思うのです。ドイツ人はそれをちゃんと整理して残しているから十分反省しているのかもしれない。しかし、いくら記録しているからといって、それで人間の暴発は終わったとは言えないと思います。

何回バブルが崩壊したって、次のバブルをわれわれはたぶんとめられないという問題を抱えているわけです。人間社会の問題は決してそんなに簡単な問題ではないということを改めて思い知らされたというのが私の率直な感想です。

そういう問題提起をしていただいた池内先生に感謝の念を述べたいと思います。ありがとうございました。
(拍手)

開催日：2015年7月3日(金)